

〔書評〕

## 真下 厚著『声の神話——奄美・沖繩の島じまから』

居駒 永幸

本書は、奄美沖繩の「声の神話」の実態を報告し、その生成を究明する十二編の論文から成る。それらは長年にわたる現地調査から生み出された論考（未発表一編を含む）であり、伝承者への地道で丹念な聞き取りに基づくものである。

著者は、民話調査ではじめて奄美・沖繩の島々を訪れ、さらにここ十五、六年は年に数回通っているという。それは奄美沖繩の神話を「地域に生きている人々や現実の社会にできるだけ近づき、そのなかに身を置くようなかたちで感じ、考えてみたい」（「あとがき」二七一頁）からだと述べている。後にも触れるように、神話を伝える人々や社会を重視する姿勢は、それが著者の研究方法でもあることを示している。著者が解明しようとするのは「声によって発せられ伝承される神話の生成・流動する様相やはたらかき」（同）であり、そのために声を発する人や社会との関わりからその実態を見出したいという。そのようなオーラルな神話を、書名にあるようにあえて「声の神話」と呼ぶのは、「文字化され、資料化されてしまうところからは捉えがたい、声として発せられ

ることばのわざを捉え、それを発する人との関わりを考えよう」（同）という意図からである。

奄美・沖繩の昔話調査をはじめた著者は、そこに民間巫者が伝承する神々の物語、すなわち山下欣一氏が提示した「民間神話」（『奄美説話の研究』一九七八年）や「民間神話」（『南島民間神話の研究』二〇〇三年）の世界があることを知る。著者の恩師で、一九七〇年代から南島の昔話調査を続けている福田見氏もまた、南島における「民間神話」「民間説話」を論じている（『南島説話の研究』一九九二年）。「声の神話」の概念は、このような「民間神話」の存在とその研究に大きな影響を受けることで形づくられていったと言つてよからう。奄美沖繩でのフィールドワークを通して膨大な「民間神話」「民間説話」に出会った著者は、その先行研究を十分に踏まえながら、「声として発せられることばのわざ」のありように分け入つて「声の神話」のダイナミズムをとらえるに至つたことになる。

本書の内容紹介も兼ねて目次を掲げておこう。

第一部 声の神話をめぐって

第一章 声の神話の生態―宮古諸島からの素描―

第二章 声の神話の形態―奄美・沖繩の呪詞と説話―

第三章 声の神話の表現―宮古島の呪詞・説話から―

第四章 声の神話の地域性―奄美・沖繩の呪詞をめぐって―

第二部 説話の伝播と伝承

第一章 奄美・沖繩地方の民話の特質―(島)の文化―

第二章 始祖神話伝承の形成―宮古島上比屋御嶽伝承をめぐ

って―

第三章 神婚神話伝承の形成―宮古島漲水御嶽伝承を中心に―

第四章 艶笑譚の伝播と変容―奄美・沖繩の蟬女房譚をめぐ

って―

第三部 声の神話の社会

第一章 神役・巫者と声の神話―宮古諸島から―

第二章 女性神役の人生史―伊良部島・竹富島の女性たち―

第三章 女性神役の就任と社会―竹富島のカンツカサたち―

第四章 祭祀と芸能―宮古・八重山の祭祀をめぐって―

「声の神話」の学的定位を目指す本書は、当然のことながら著者のフィールドワークの軌跡と思索の過程を明瞭に示している。もっとも早い時期の論文は、第二部の第一章を除く三編で、「初出一覧」によれば一九八〇年代前半に書かれた、著者の民話調査による成果である。これらの論は、宮古島に伝承される民話のい

くつかが御嶽由来説話という形をとることに注目し、その類話との比較・分析の方法を通して、いかなる伝播と変容を経て御嶽伝承として形成されていったかという点を解き明かそうとするものである。伝播の観点としては本土説話との交流が視野に入ってくるが、十八世紀に彦岐で書かれた『神国愚童随筆』と宮古島の艶笑譚との類似性から、著者は「民話における『海のネットワーク』」(八〇頁)を指摘する。南島説話の一つの素材源を突き止めた、と言えるかどうかはわからないが、その伝播経路の一端が明らかになったとは言えるだろう。そして著者は、御嶽伝承の形成に、「神役たちを中心としてその始源たる神々の世界に思いを寄せる島びとたちの心意」(一一二頁)を見ようとするのである。それは奄美沖繩への著者独自のまなざしであり、本書のテーマはそのような視点において必然的に導かれるものであった。

第三部の諸編は、「声の神話」の伝承者である神役・巫者とその社会への視点から書かれた論である。特に第一章では、神役・巫者の神秘体験と神話との関わりを追究し、「声の神話」の生成の現場に迫ろうとする。その論の中で、宮古島の神役であるユーザスやアブンマが日光感精神話や神婚神話に似た神秘体験をすることに注目し、「神話から神秘体験へ」というプロセスを指摘する。また、巫者であるカンカカリヤーに、「神秘体験から神話へ」というプロセスにあてはまる比嘉トヨさんのような例があることを紹介し、巫者が自らの神秘体験に意味づけすることで神話が生成されることを明らかにしている。

比嘉さんには私も話を聞かせてもらったが、宮古島の創世神話や嶺の上で宮古島の創造神が体に移ってきたという体験談には鮮烈な印象を受けた。宮古島ではカンカカリヤーのことを神の人も言うが、それは神と交感し一体化できる人のことなのだとその時実感した。カンカカリヤーは神と触れ合うことを契機として神の人になり、神が教える話としての神話を語れるようになる。このような神役・巫者の神秘体験に「声の神話」の発生を見る著者の立場は、豊富な聞き取り調査による事例から導かれることで説得力をもつ。

「声の神話」に関わる神役・巫者の存在とその神秘体験がクローズアップされたわけだが、著者はさらに伊良部島のカカランマや竹富島のカンツカサという女性神役に照明をあて、聞き書きを通して一人ひとりのライフ・ヒストリーを浮かび上がらせる。その上で、女性神役の就任が社会に認知されるシステムについても論じている。そこで明らかになったことは、女性神役の就任には神に選ばれたことを示すしるしと権威ある判断が必要であり、それによってオンビ（氏子）の承認が得られるというシステムである。それは「彼女たちの不思議な体験がいかに社会化されるかという問題」（二四五頁）なのだという。

このように第三部では、神役・巫者の社会的存在に著者の関心が向かっている。ライフ・ヒストリーといい、社会的認知システムといい、一見すると文化人類学や社会学の問題のように思える。しかし、冒頭に触れた「地域に生きていく人々」を通して考えようとする

する著者の姿勢からは必然的な課題なのであって、女性神役への数度にわたる聞き書きは、著者の信念と熱意を感じさせて余りある。

最後に第一部を取り上げる。書評の順序としてははなはだ首尾が悪いように見えるが、必ずしもそうとばかりは言えない。諸論すべてのタイトルに「声の神話」の語を冠するように、第一部は本書の中心的な論考と位置づけられるものである。したがって、第二・三部を概観した後に第一部に触れることは、むしろ本書のテーマをよく理解することにつながると言えよう。

著者は「声の神話のダイナミックな様相は文献神話を文字で読むだけでは捉えがたい」とし、「発生・伝承・流動する声の神話」の生態を明らかにすることによって「文献神話を相対化する」（二三頁）ことを意図する。その「声の神話」のダイナミズムは、「生態」「形態」「表現」「地域性」という多角的視点からとらえられる。著者は、「声の神話の生態」について、宮古島狩俣のタービヤフサの呪詞を取り上げ、発声のしかたが一樣でないところに「声の表現方法とその意識というテーマ」（五頁）があるとする。神役・巫者が発する神話や神秘体験がその身体を共鳴させて朗誦されるとき、「声の神話」は、文字で書かれた神話以上に、力あるものとして直接に発し手や聴き手にはたらきかけてくるものなのである」（一二頁）と述べ、声の神話の位相あるいは権威について言及する。

確かにタービヤフサを聞いてみると、最初はぐもつた低い声で始まり、途中からだんだん高揚して大きな高い声になるという

声の変化がある。しかも草冠で頭部を覆い、朗誦する際、木の葉のついた杖で地面を衝いたり、葉を揺らしたりする女性神役もいる。そのときの声と所作は神を現前させる力があり、聞いていて圧倒される。著者がこのようなりアルな「声の神話」の生態を提示したことは大きな意義がある。ただ、「声の神話」というテーマに対する期待からすれば、「声」がどのような表現の特質をもたらすのかという音声神話の表現論をもつと知りたかつた思いが残る。同時に、どのように文献神話を相対化することが可能になるのかという視点から、音声と文字のテキスト論にも言及があれ

ばもつと理解できただろう。「声の神話」の身体性については著者も触れているが、「懐かしい身体を瞬時に現前させるのが声なのだ。それのために書字というメディアは、身体を不在を前提とする」(石光泰男「浄瑠璃における声と音」『文学』第五卷第二号、二〇〇四年三月四月)という指摘があるように、そこには身体と身体を不在という表現論理の問題がある。

第一部での著者の主張で重要なことは、「声の神話」には「祭儀の中心で朗誦される特別な韻律をもつ呪詞としての神話」と「祭儀の周辺または外側で話される説話としての神話」(三七頁)の二面性を指摘する点である。かつて古橋信孝氏は、祭式の間でうたわれる「神謡」と祭式の外にある説明としての「神話」という概念を立てた(『古代歌謡論』一九八二年)。著者はそれに対して、祭儀周辺の説話は「固有の表現・叙述に従って伝承されてゆくもの」(三二頁)とし、そこに自立性や固有性を認めている。なぜ

なら著者は、神謡の説明としての神話ではなく、「説話から呪詞への過程をたどつたと推定」(同)するからである。つまり、周辺地域の説話形態の神話が流入し、「そのようなものを素材としつつ、祭儀のなかで朗誦する呪詞が生み出され」(同)たするのである。このような著者の見解は、奄美沖繩の神歌と神話の研究に資するところ大であり、この問題について今後さらなる検証と討論が巻き起こることを期待したい。

冒頭に述べたように、本書は奄美沖繩の「声の神話」の実態と生成についての研究である。大きな視野からの長年の調査によってそれは可能になった。調査が奄美沖繩全体に及ぶことは驚くばかりであるが、著者と伝承者や地元研究者との深い交流がその研究に厚みを加えている。さらに驚くことに、著者はもう一冊の研究書『万葉歌生成論』(三弥井書店)を本書と同時に上梓している。その第一部「万葉歌と声の世界」の諸論をも併読すること、本書の理解は一層深まるにちがいない。

本書が奄美沖繩の神話伝承の研究に新たな地平を開いたことは間違いない。本書によって奄美沖繩の民間文芸研究は、調査と採集から方法論に移つたという感を強くする。著者のエネルギー的な研究は、さらにもつような成果を見せてくれるのか。次なる展開を待望しながら読んだ次第である。

(二〇〇三年九月二五日 瑞木書房刊 二七七頁)

本体価格三九〇〇円)

(いこま・ながゆき 明治大学教授)